部活動報告・教材研究

高村光太郎の書

及川　厚
Atsushi OIKAWA

《第一章》　高村光太郎の家系　―文学的な血を中心として―

三

光太郎には二人の姉がいる。五歳で病没した姉「うめ」と十六歳で亡くなる「さく」である。「さく」のことは前にも度々触れてきたが、北川太一氏が言うように、高村家の中では文芸に長け、神官の娘で古典にも通じ、歌もなかなかうまい。かなりの文学的才能を持っていた祖母の影響を直接に一番強くうけているのはこの「さく」であることは間違いない。そして、その「さく」の影響を一番強く受けているのが光太郎なのである。しかし、よく考えてみると祖母「すぎ」の直接の子供である光雲には影響が見られないのはなぜなのか。光雲の父中島兼吉は前にも書いたが、いろいろな物を縁日で売って病気の父親を養わなければならず、それらを売るためには「てきや」の仲間に入らなければならなかったようである。兼吉はその中にあって浅草では相当に偉い人であったらしい。その兼吉が後妻としたのが「すぎ」であり、兼吉はこの「すぎ」に感化を受けたようである。光太郎の「回想録」[注1]の中に

人の話では何でも誘拐されて祖父の許に来たと言ふ。そして後妻になつて祖父を扶け、それが祖父を感化して了つた。祖父はもともとそれに生まれついた人ではなかつたから、祖母を貰つてからは足を洗はうとしてゐたらしいが、どういふきつかけか知らないが兎に角足を洗つて、私の父が奉公の年季が明けたころにはもう素人で、それから隠居して、父が当主になつたのである。

光雲にとっては異母兄弟となる先妻の子供で後まで「中島と言っている相当うまい大工」[注2]がいたようで、光雲にとってこの兄の存在は見逃せないものであるし、光雲は「すぎ」の直接の子供ではあるけれども、父の影響、とりわけ、その仲間たちの環境に大きな影響を受けたようで、「連中が祖父のところに出入りするのを、父は実に厭がつたものだ。」[注3]ということからも知ることができるのは、よい刺激ではなしに、光雲にとって受け付けられないものであったらしいということである。

おいかわあつし：国語科教諭、書道部顧問

光雲が「すぎ」の影響をあまり受けていないようだが、光太郎が言う「職人としての美質と弱点」の美質という部分に含まれているのではないだろうか。[注4]「父との関係」に

父はよい職人の持つてゐる潔癖症と律義さと、物堅さと、仕事への熱情とを持つてゐたが、また一方では職人にあり勝ちな、太つ腹な親分肌もあり、多くの弟子に取りまかれてゐるのが好きであり、おだてに乗つてむりをしたり、いはば派手で陽気で、その思考の深度は世間表面の皮膜より奥には届かなかつた。そして考へるといふやうなことが嫌ひであつた。この世は人生であるよりも娑婆であつた。学問とか芸術とかいふものよりも、芸人や役者の芸の方が身近だつた。

つまり、これは母である「すぎ」の影響を父兼松や師の高村東雲の江戸っ子としての特質や彫り物師としての中でしか生かせなかった事を示している。高村東雲のもとに奉公として上がっていた期間が、文学としての資質を伝授され損なったとも考えられる。そのような環境の中で東雲を師とする彫刻の世界のみが彼の生きる世界、と彼自身限定していた。

時代的に見ても光太郎とは様々な面で違い過ぎるのである。学問や芸術に関心を示さず「読み書きができればよい」ぐらいにしか考えられないところは江戸末期・明治初期の江戸っ子職人のひとつの思想だったようなところがあるのではないかと思う。これらのことが「すぎ」という遺伝的には申し分ない血を備えてはいても、光雲にとって環境的時代的に、文学的なものを排除し、排除させられたと言える。帝室技芸員従三位勲二等、東京美術学校教授、そして多くの弟子たち。当時から光雲は広く彫刻家として認められていた。光太郎も

美術史上から見ると、明治初期の衰退期に彫刻の技術面に於ける本質を、父の職人気質が頑固に守り通して、どうやらその絶滅を防いだことになる。彫刻の技術上の本質については無意識のうちに父は伝統の橋となつた。[注5]

と言うように、文芸の方面には秀でなかった光雲にも、その精神の源には「すぎ」の影響を見ないわけにはいかない。光雲がいろいろな肩書きを残すことが出来たこと。彫刻に於ける技術を後世に伝えることが出来たこと。それらは運が良かったのではなく、光雲の持って生まれた質の高さにも重要な関りを見いだせるのである。

ところで、「すぎ」の直接の影響を受ける人間がもう一人現れる。それが光太郎の姉の「さく」である。「姉のことなど」(昭16・4)、「子供の頃」、「回想録」などに書いているが、

私は姉さんが絵筆を大切に簾に巻き、墨や道具を紫色のたたうに入れて、冬になると御高祖頭巾をかぶつて毎朝早く出かけてゆく姿を実に尊敬していた。[注6]

とあり、後年、豊周氏が語るように光太郎が弟や妹の勉強を見る態度に「字を大切にする習慣」が一番良かったとあるのは、光太郎は自分も姉のように弟たちの目には映って欲しかったのかもしれない。

他人の言ふ事はきかないでも、姉さんに言はれれば何でもその通にした。姉さんは御師匠さま思ひで、礼儀が正しくて何で

もきちんとしてゐて、勇気があつた。[注7]

としているところからも、親愛・礼儀・勇気を兼ね備えた少年光太郎のヒーローのような人物である。北川太一氏は

甘い一方の祖父ともちがい、子供には全くの放任主義で、仕事場に入ってしまえば殆ど交渉のないちちともちがい、またひたすら奉仕にあけくれる母ともちがう、しっかりものの頼り甲斐のある姉の存在が、少年光太郎にある安心を与え、生前も死後もその心を強く鼓舞しただろうことは想像できる。[注8]

としている。この姉の「さく」は

母が長唄をやるので、初めは長唄を仕込むつもりで稽古をさせたが、三味線はさっぱり物にならず、「宵やまち」程度でこれは駄目だといふ事になったらしい。ところが読み書きの方は六七歳の頃から中々よく出来るので、父が西町に居たころ、程近い竹町の生駒様の屋敷内に住んで居た狩野派正統の画家狩野壽信といふ師匠のところへ入門させた。…（中略）…ともかく姉さんは狩野門下になつてからは、三味線の時とはまるで違つて喜び勇んで稽古をはげみ、草の芽の伸びるやうに目に見えて絵も上達した。[注9]

と光太郎が語るように、その文芸的才能を開花させたのはこの時からのようで、姉も勿論だが、その才能を見抜いた光雲の目の素晴らしさにも驚かされる。もしかしたら自分の母「すぎ」の才能の遺伝を「さく」に見たのかもしれない。ところで、「さく」が女であるということは重要である。これが男であったら当然彫刻家を継ぐことになるから、文学方面のことを光雲は許さなかったと思う。ともあれ、このことは光太郎にとって幸運なことであったと言える。それは長男として生まれてはいるものの女二人の次の子として生まれていることは待望の男の子として育て上げられてはいるが、直接的に祖母「すぎ」の影響を受けなかったことになり、そして、それは光雲の二の舞になることがなくなることを意味し、日常の小さな出来事を大切にしていこうとする態度を姉に学べたことなどは全て、光太郎に遺伝されているであろう文学的な血を、目ざますことになったのである。

私は子供心に姉さんを崇拝してゐたが、生前別にこれといつて教訓をうけた事もないのである。ただ絵のうまい、強い姉さんと一緒に居るのがうれしいだけであつた。しかし後年になつて物心づいてから、昨日のことのやうに父や母が此の姉さんの挙措を話すのを聴いてゐるうちに、いつの間にか其の強い感化を受けるに至つた。[注10]

としている光太郎に「さく」からの文学的な直接の影響を見る事は出来ないが、光太郎が後に詩人として文学的な歩みをしていくことに関して、「強い感化を受けるに至つた」ことが重要な問題であることは疑いない。「祖母の影響は、尊敬していたこの姉を通じて、光太郎に及んだであろう」とする北川太一氏の言葉が思い出される。それはそれとして、光雲・光太郎と共に「すぎ」の血を受け継いでいるにもかかわらず、光太郎に文学的な才能が芽生えるのは何よりも姉の存在が一番であることは、以上見てきた通り納得のいくとこ

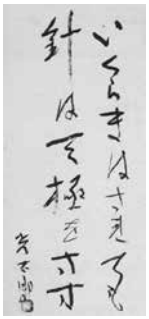
ろであると思う。この存在なくしては光太郎の文学的な目覚めがなかったと言っても過言ではないだろう。

注1　「回想録」（「美術」　昭20・2）
注2　請川利夫「光太郎詩にみられる『家』の影響―特に父光雲との関係―」（『高村光太郎論』所収　教育出版センター　昭44・4）『光雲懐古談』の中の「幸吉（光雲）もはじめて父に大工になることをすすめられたようである。」という一文がある。
（平成3・2）に拠る
注3　同注1参照
注4　「父との関係」（「新潮」　昭29・5）
注5　同注4参照
注6　「姉のことなど」（昭16・4）
注7　同注6参照
注8　北川太一『高村光太郎』アムリタ書房・星雲社（昭58・4）
注9　同注6参照
注10　同注6参照

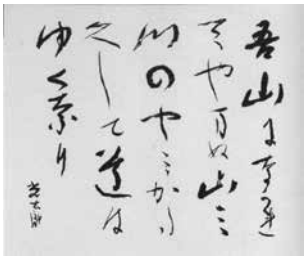
高村光太郎の書（p.1 ～ 4）及川 厚

北上山系を背に、昭和 24 年 10 月 66 歳
（撮影＝濱谷 浩）

「手」ブロンズ塑像、大正 7 年



「いくらまはされても針は天極をさす」
（昭和 27 年頃書）



「吾山にながれてやまぬ山みづのやみがたくして道はゆくなり」（昭和 28 年 7 月書）

「鯰」木彫、大正 15 年

新潮日本文学アルバム 8
高村光太郎
一九八四年六月二〇日発行
一九九三年一月一〇日七刷
新潮社

「鯰」詩、大正 15 年 2 月作